

## 「シャン」世界とその脈絡

高谷紀夫

- 1 歴史叙述の中の「シャン」
  - 2 人類学的記述の中の「シャン」
  - 3 メーホンソーンの「シャン」の多様性
  - 4 「シャン」を類別する複数の見方
  - 5 「シャン文化圏」の意味するもの
- 付 ビルマ政府文化省民族調査項目

### 1 歴史叙述の中の「シャン」

サンジェルマーノ (Father V. Sangermano) 神父の紹介から始めよう。

イタリア人宣教師である神父は、1783年から1808年までビルマに滞在した人物である。彼の滞在期間は、アラウンパヤー王朝の前半にあたり、英国によるビルマ植民地化の先鞭となる1824年の第一次英緬戦争の前でもある。従って、植民地化以前のビルマを知るひとりであり、その意味で、彼がその見聞と伝聞に基づいて書き残した『ビルマ王国の記述』は、資料として引用に値する。

本論は、ビルマ世界における諸民族の動態を考察する手がかりとして、可能な視点の総括と、既存の資料の整理を目的としている。「ビルマ世界」というあいまいな表現にしているのは、「民族」「民族意識」あるいは「民族間関係」と考えられているものが、ひとつのある立場からの「世界」解釈であり、ビルマ世界がどのように捉えられてきたか、そして現在捉えられているかということの問題としているからである。そのために、ミャンマーではなく、ビルマを用い、ミャンマーを使うとするならば1989年以降の国家体制を問題とする脈絡に留めたい。

上記の問題意識に基づいて、ここで考察対象とするのは「シャン」をめぐる表現の用例である。「シャン」という呼称は、自称ではなく他称が起源であり、しかも広汎に用いられている。この事実は、「シャン」というタームをめぐる考察が、誰によって、どのような脈絡において呼ばれたかということ抜きにしては不十分であることを示唆している。ビルマ世界の中で、

あるいはその周辺で、「シャン」は、どのような意味を負ってきたのだろうか、あるいは負わされてきたのだろうか。「シャン」を「非-シャン」と区別する由縁とは何だろうか。また「シャン」の内部に区分の由縁はないのだろうか。

サンジェルマーノは、「ビルマ王国の住人」という項目の中で次のように記述を進めている。

「ビルマ王国を構成する領土は、ひとつの民 (nation) だけが住んでいるのではなく、本質的に言語も生活も慣習も異なる人々が住んでいる。これらの中での中心は、かつてのアヴァ王国と呼ばれた土地を占拠したビルマ族 (Burmese) である。・・・次に重要なのは、過去においてビルマ族と覇権を競ったペグーの民 (Peguans あるいは Talaings、Mons、Muns) である。彼らはかつて強大な君主制を誇り、長い間アヴァ王国を支配していた。・・・三番目の民は、アラカン族 (Aracanese) である。・・・ビルマ族からアラカンとカッセ (マニプール) を分ける山間部には、チエンと呼ばれる民 (Chien あるいは Chin、Khyeng) が住んでいて、その一部は独立しており、一部はビルマ王国に服従している。・・・チエンの山の東にジョーと呼ばれる少数の民 (Jo あるいは Yaw) がいる。彼らはかつてはチエンだったと思われるが、次第にくずれた形ではあるがビルマ語を話し、ビルマ族の習慣を採用しながらビルマ族になった。彼らは一般に妖術師や邪術師とみなされており、そのためビルマ族に恐れられて、復讐されかねないと粗雑な扱いはされなかった。・・・ジュナン (Junan あるいは Yunnan) の中国領とシャム (Siam)、さらにアヴァ王国に囲まれた北緯 25 度から 20 度に広がるすべての土地は、シャム (Sciam あるいは Shan) と呼ばれる多数の民が住んでいる。彼らはラオ (Lao) と同一である。彼らの王国は、ソーボア (Zaboa あるいは Sawbwa) と呼ばれる多数の領主あるいは小王に支配された小さな地域に分割されている。現王の父君であるアラウンパヤー王の御世から現王の代の最初までは、すべてのソーボアはビルマ族に服従した属国であったが、支配者の残酷な独裁、絶えない苦痛、圧制に耐えかねて反旗を翻した者も多かった。その者たちはすべてシャム (Siamese) と同盟を組んだ」 [Sangermano 1893 (1995) : 42-44]。

記述はさらに、カドゥ (Cadu)、パラウン (Palaun)、コー (Koe)、カチン (Cachin)、カリアン (Carian)、赤カリアン (Karenni) についても言及している。尚、原本はイタリア語で、今回参照したのは 19 世紀半ばになって英訳されたものである。従って人々の呼称の正書法はイタリア語そして英語という順で綴りが使われている。付録に英国側の諸民族理解によるデータの追加がある。つまり、参照文献は神父の「世界」解釈がその当時の英国人によるやはり

「世界」解釈によって翻訳されたものということになる。

サンジェルマーノ神父の民族に関する理解は、滞在中における見聞から得たものと思われるが、ビルマ側からの視点に沿ってなされ、王国の権力的中心からの距離によって順に列挙されている。現在の民族呼称を用いるならば、ビルマ、モン、アラカン、チン次いでヨー、シャンと続いているのである。ヨーは、イラワジ河の西岸に住むビルマ語系の方言を話す人々とされている。現在でも、呪術を巧みにする人々が多いと信じられている。1983年のセンサスによる国内135民族の中にも含まれている。

神父が見聞をした時代は、ボードーパヤーという王国の版図を最大にしたビルマ王の御世である。アラウンパヤー王朝の成立は、モンからの覇権の奪回を契機としている。モン族の言及がビルマ族に次いでなされていることは、その経緯からもっとも思われる。アラカン地方が征服されたのは、1785年であり、神父がビルマへ到着した2年後である。また彼の滞在期間は、王国の拡張政策がアッサム方面へ向けられていた時代でもある。従って、チン側が非服従、服従それぞれのグループがあったことの記述もうなずける。ところがシャンあるいはシャムについては、ソーボアの支配する土地として描写されている。つまりビルマ側からの「自分たちとは異なる」人々への理解が、シャンに対してだけ異質なのである。政治単位の首長について言及されているのは、シャンだけであり、しかもその認知のなされ方から、神父あるいはその記述の源泉となったビルマ側の「世界」解釈として、シャンの存在の認識が、その首長であるソーボアとセットになっているのである。つまり「世界」解釈のキーワードは、「シャン」というよりも、「ソーボアの治めるシャン」なのである。そして、その土地を、英国人たちは、シャン・ステート (Shan State) と呼んだ。ソーボアは、シャン系だけではないことは知られているが、その主力はシャン系である。シャン・ステートは、シャンの民の土地というよりも、シャン・ソーボアの治める土地なのである。従って、「シャン」と「非-シャン」を区分する観念的な由縁は、ソーボアに代表される首長の存在である。そのシャン・ステートという呼称が、複数形シャン・ステーツ (Shan States) として包括的に、知られる限りの英国人による記述に登場することからも明らかである (ソーボアは、ビルマ語の原発音に近い。シャン語ではツァオフアーと呼ばれることが多い。本論では、そのままソーボアで通すことにする)。

サンジェルマーノの記述でもうひとつ注目すべきは、そのシャンと呼ばれている人々の領域の画定に関してである。「雲南、シャム (Siam) そしてかつてのアヴァ王国で当時のビルマに

囲まれた北緯20度から25度のすべての土地」というのは、かなり曖昧といわざるをえない。つまり、それぞれの王権の勢力範囲の間隙のすべてがシャンと呼ばれる人々の居住地なのである。しかもソーボアという多数の首長が治める複数のステートとして解釈されている。換言すれば、ソーボアの政治的な求心力が周囲と比較して不安定なものであり、さらにステートがソーボアの存在する点でしか把握できないことを暗示しているようにも思える。

植民地時代のシャン・ステーツに関して、もっともまとまった記録は、現在に至ってもスコット (James George Scott) による *Gazetteer of Upper Burma and Shan States* 全5巻である。その冒頭で次のように該当地域について説明されている。

「上ビルマの北と北東の境界は、結局画定していない。概観的にいえば、上ビルマは、北緯20度と27度の平行線と東経92度と100度の平行線間に位置する。東西間の最長距離は500マイル、南北間は450マイルである。上ビルマの面積は83478平方マイル、北と南のシャン・ステーツ (Northern and Southern Shan States) は、40000平方マイルを少し上回る程である。北方の境界になる地方は、マニプールの属国、ナガー及びチンポー丘陵、雲南の中国領、チャイニーズ・シャン・ステーツ (Chinese Shan States)、インドシナの仏領、サイアミーズ・タイ (あるいはラオ) ・ステーツ (Siamese Tai (or Lao) States)、南方は下ビルマ、西方はアラカンとチッタゴンになる。これらの境界内において、半属国的な扱いで統治されているのは、区別して記述している通り、北と南のシャン・ステーツである……」  
[Scott & Hardiman 1900: 1]。

英国の植民地になって複数のソーボアの治める土地が、北部と南部に行政区画として収斂されたのである。ビルマ王国の全土がすべて英領になってから3年後にあたる1889年には、シャン・ステーツ統治法が施行されている。シャン・ステーツにおけるソーボアの権力は、そのまま英国による間接統治を仰ぐという形式で温存された。スコットの表現の中にもあるように、英国人の記述にはシャンの前に接頭辞がついた用語が数多く見られる。たとえば、Chinese Shan、Siamese Shan、Trans-Salween Shan、Cis-Salween Shan、Hkamti Shan、Lao Shan である [Scott & Hardiman 1900: 188, Temple 1906 (1991): 65]。

トランス・サルウィン・シャンとは、ルー、クウンをさしている。また、スコットは、シス・サルウィン・シャンとクウンは、British Shan と呼べるかもしれないとも記述している。上記の他に、ヨーダヤ・シャン (Yodiya Shan) という表現もある。ヨーダヤとは、アユタヤに由

来する、現在でも用いられているタイ王国への呼称である。だが、ここではその具体的な同定が問題なのではなくて、この地方の当時の専門家であるスコットが、接頭辞をかなり容易にシャンにつけているという事実が問題なのである。シャンという呼称に、その居住地域や、地方名、さらに一部民族名ともいえるカムティ、ラオがつけられているということは何を意味するのであろうか（ちなみにサイアミーズ・シャンのひとつとして、テンプルが言及しているのは、ズインメーつまりチェンマイのシャンである）。

シャンに関する歴史叙述はまだまだ数多く存在する。ただ少なくとも、本論では引用しなかった文献への概観をもふまえて、歴史叙述の中に認められる「シャン」の観念に関して、現段階では次のような暫定的な総括をしたい。

総括の要点は、シャンという存在が、単に他称である以上に、他者とのかかわりの中でビルマ側そして英国側に認知されてきたという事実の重要性である。シャンと呼ばれている人々の側からの、見方や、自己認識が、記述の中に全く認められないのである。この点は、シャンが政治的弱者であり、歴史的に英国の支配がビルマ世界より東には及ばなかったという時代的背景が関係していることはいままでもない。

歴史的脈絡の中で、現在の我々が「シャン」をイメージする際にも、英国側の見方がバイアスとなっている。当時、北方あるいは北東には清国が控え、さらに東方には仏国の植民地支配が及んでいた。政治的力関係において、シャンと呼ばれた人々は、被支配と反乱を繰り返す弱い側であり、同盟の相手ともいべきシャムは、ちょうどサンジェルマーノ神父がビルマを訪れた頃にあたる1782年に、ラーマ1世が即位し、ラタナコーシン現王朝が成立したばかりで、シャンが自己認識をする介在として、タイ系の言語を話す人々を束ねる求心性を帯びているとは、必ずしもいいがたい状況であったようだ。「シャン」の意味を歴史的に考える時「他者とのかかわり」という視点は、必須なのである。

とするならば、論理的に次の疑問が生じることになる。つまり実態としてのソーポアの治める土地が、自律的だったのかどうかという疑問である。上記の考察は、あくまで、歴史叙述に認められる記述した側の見方によるいわば観念上の「シャン」である。ところがシャンの実像は、その観念上の「シャン」と全く無関係だったのだろうか。歴史叙述の記述者をそう記録せしめる実態上の特質が「シャン」と呼ばれた人の側にはなかったのだろうか。

スコットの記述にあるように、シャンのタームの前に付く、識別のためと思われる接頭辞が、

一見安易に用いられているというのは、ケントウン（チャイントウン）・ソーボワのような一部有力ソーボワを除いて、具体的なソーボアの治める土地が想定されていないということである。とすれば「シャン」というタームが、個別的ではなく、包括的に英国側に用いられてきたことを意味する。個別性があるとすれば、それは英国側あるいはビルマ側からの一方的な見方による。つまり、ソーボアの存在の認知から、シャン・ステーツつまりシャン諸州と複数形で「世界」解釈していながら、その具体的認識はあまり顕著ではないのである。英国が間接統治を行ってきたことは、政治的に類別することがさほど意義を持たなかったことを意味する。だが、それだけではなく、英国側がその世界に対して、文化的あるいは社会的に実態としての何らかの均質性を認めてはいなかったろうか。シャン諸州のソーボア体制は、実態はともかく英国植民地時代を経て、ビルマ連邦独立後1959年まで継続する。シャンの実態に関して、シャンを具体的な他者とのかかわりの中で考察を試みる。

## 2 人類学的記述の中の「シャン」

スコットによって編まれた上述の膨大な地誌は、そのタイトルにある通り、「ビルマ」と「シャン」の世界が記述の対象となっている。いうまでもなく、英国にとって、これらの世界が統治すべき対象であったことは歴史的事実である。しかし「ビルマ」側と「シャン」と呼ばれた人々の間には、ビルマ王と複数のシャン・ソーボアを当事者とする政治的交渉関係が、植民地化以前から存在したことは、サンジェルマーノ神父の記述から確かである。つまり、当時のビルマ側からの「世界」解釈として、「ビルマ」と「シャン」を包括的に捉える見方もまた存在したともいえそうである。とするなら、スコットの編集方法との間には、ある連続性が認められることになる。「シャン」は他者とのかかわりの中で理解されてきた、しかもそれは見方の主体の位置だけによるものではなく、「シャン」世界の特質とも考えうる。その脈絡で参照したい記述は、人類学者によるものである。

人類学的に「シャン」は、重要な学問的意味を帯びている。いうまでもなく、E. R. リーチ (Leach) の『高地ビルマの政治体系』の上梓による。この著書は、「シャン」と「カチン」の名前を知らしめると同時に、既存の「民族」論への批判ともなっている。リーチは、冒頭の問題の所在と論旨を明らかにする部分で次のように述べている。

「彼らのあいだには多くの異なった言語や方言が見いだされ、場所ごとに文化も大きく異な

る。にもかかわらず、彼らはふつう、シャンとカチンという二つの名称のいずれかで呼ばれる。・・・（彼らは）人種的にも別系統のもののみなされてきたのである。したがって、カチンを論じる時にシャンを無視し、シャンを論ずる時にはカチンを無視するというのはごくふつうのしきたりになっている。ところがカチンとシャンは、ほぼどこでもとなりあう隣人であり、日常の暮らしにおいては区別をつけがたい」 [Leach 1954 (1987) : 1-2 (2-3)]。

「カチンは政治の分野において、二つのまったく対立する生活様式理念をいだいている。その一つはシャン的な政治制度であり、封建的階層制に類似したものである。もう一つは本書の中にグムラオ型組織として登場する、本質的に無政府的主義的、平等主義的なものである。・・・要するに私が言いたいのは、各カチン地域社会が、政治組織の二つの極型のあいだを振り子のようによれうごいていることである。一つの極型はグムラオ「民主主義」、もう一つはシャンの「独裁政治」である。現実のカチン地域社会の大多数はグムラオ型でもシャン型でもなく、本書でグムサ型と呼ぶ体系に組織されている。グムサ体系は実際はグムラオ理念とシャン理念のあいだの一種の妥協の産物である」 [Leach 1954 (1987) : 8-9 (10-11)]。

リーチの著書は、カチンからシャンになった男の陳述で始まり、そしてまた同様な経歴をもつ男の陳述で閉じられる。前者の男の家族は、過去カチンでもシャンでもあったとも紹介されている。「民族誌の中で一個の文化、一個の部族なる単位を指定する通例のやり方は、絶望的なまでに不相当である」 [Leach 1954 (1987) : 281 (321)]。リーチの論旨を支えているのは、引用する民族誌的事実にあるような「グムラオになる」あるいは「シャンになる」というカチン人の言説である。「シャン」と「カチン」は区別して捉えるべきではないという確信から、それを貫く社会システムの分析を試みたのである。我々が学ぶべきなのは、リーチによる事実の理念的解釈という方法論、「カチン」の政治体系の解釈もさることながら、「シャン」と「カチン」の包括的社会論の有効性である。リーチも若干言及しているが、「シャン」社会の理解は、他者とのかかわりの中で、なされなければならないのである。

「シャン」社会の人類学的研究は、リーチの現地調査以降、第二次世界大戦後の独立運動などの政治変動の中でほとんど進展しなかった。リーチの調査地は、中国とビルマ連邦の国境周辺であり、外国人の訪問が両国によって認められてこなかった。最近少しずつ門戸が開かれつつあるとの観測もあるが、情勢は流動的である。「シャン」社会の研究を計画する人類学者の対象地域は、タイ王国メーホンソーン県の「シャン」あるいは「タイ・ヤイ」と呼ばれる人々

の居住地であった。その研究者のうちの二人であるドゥーレンバーガー (E. P. Durrenberger) とターンネンバウム (N. Tannenbaum) の共著による論文を紹介しよう [Durrenberger & Tannenbaum 1989]。

論文のテーマは、タイ王国の山地民と平地民の宗教的構造の連続性を認められるのか、もし認められるとするならば、それはどんなものであろうかというものである。ドゥーレンバーガーは、北部タイのシャン村落だけではなく、山地民であるリスに関する実地調査を行なっている。つまり、ここで資料とされている山地民とはリスであり、平地民はシャンをさしている。また、宗教的構造として念頭におかれているのは、それぞれの世界観とりわけ力観念である。結論として彼らが導いた点は、その連続性であり、その類似性は、山地民の文明世界への同化によるものではない。またシャンの世界観においてリスのそれよりも顕著である仏教的なイデオロギーや文明の影響は、二次的なもので、その世界観の根本は、非仏教的なものであるという2点である。力観念は、それぞれの世界観の中心原理であり、力観念によって、人間とその他の生物の世界観の位階が規定される点で、共通していると分析している。

彼らのいう連続性は、事実の解釈による理念的なものである。シャンとリスの当事者がその連続性を認めているわけでは必ずしもない。彼らは、世界観の理念的連続性を認めたとしても、なぜシャンとリスが類別されるかを語ってはいないのである。もしあるとするなら、山地民と平地民という居住地の高低差が問題とされることになる。

かつて、「ビルマ」から見た「シャン」が、「山の民」であり、「シャン」にとっては「カチン」が「山の民」であるという立体的な民族間関係の相対的認識を提示したことがある [高谷 1993]。リーチも「今日シャン社会の属性とされている地理的分布、相対的に洗練度の高い文化、経済組織の主要特徴は、かなりの程度まで環境に規定されている」 [Leach 1954 (1987) : 40 (46)] と指摘している。

このように、人類学的記述においても、「シャン」は他者とのかわりの中で認知される傾向がある。タイ研究において、シャンへの学問的関心は決して高くない。フィールドワークによる一次資料も非常に限られている。ドゥーレンバーガー、ターンネンバウムの他には、数人を数えるだけである [Eberhardt 1988, Tannenbaum 1990]。

この「シャン」をめぐる学問的関心の傾向の理由はいくつか考えられる。ビルマ国内のフィールドワーク制限、タイ王国内における文化の均質化などがあげられる。だが、その捉えどこ



ろのなさも認められる。ビルマにおいても、タイにおいても、「入れ墨」を巧みにする人々として「シャン」は共通して類別されてはいるが、彼らは、ほとんどすべてが仏教徒であり、水稲耕作を営む。この点は、タイ系の言語の話すしかも「シャン」とは呼ばれない多数の人々に共通している。従って「シャン」と「非－シャン」を区別する由縁が明瞭ではないのである。

リーチのいうように、あるひとつの民族についてという民族論を無効にする状況で、地域的に曖昧にしか画定されない領域に「シャン」は生活しているとみなされているのである。そして彼らは、周辺の人々との交渉の中で生活してきた。おそらくその実態は、他者との併存の視点でしか理解されない。リーチは「今日のシャン文化は、小規模な軍事植民地と土着の山地民との長期にわたる経済的相互作用の結果、この地に固有に育ったものである」[Leach 1954 (1987) : 39 (45)]とも述べている。従って「シャン」と「非－シャン」を区別する由縁が明瞭ではないというのは、解釈としては不十分で、あらゆる「シャン」と呼ばれている人々に共通する由縁が存在するという前提自体が、実態から遠ざかることになるのである。だからこそ、「シャン」をめぐる多様な「環境」こそが問題にされなければならないのである。人類学的記述の傾向は、シャン世界の持つ特質に確かに影響を受けているのである。

### 3 メーホンソーンの「シャン」の多様性

1990年以来、筆者はタイ王国メーホンソーン県のシャン村落を継続的に調査してきた。同県は、タイ王国の北西部に位置し、ビルマと国境を接している。メーホンソーンは、象を働かせる水路という意味に語源があり、チェンマイ王が、狩りのために象を集めた場所として知られている。メーホンソーンは、そのムアンの周辺に、シャンの村落があり、それぞれ河谷平野を生かして、水稲耕作を営んでいる。その歴史は、ある村落の古書によれば約200年といわれているが、調査した村落で伝聞する限りでも、それを越える伝承は聞かれない。彼らは、すべて仏教徒であるが、各村落では、村の守護霊であるチャオ・ムアンの祠が建てられている。ここでいうムアンは、シャンでは村落という単位と重なっている。そのチャオ・ムアンを祀るリエン・チャオ・ムアンは、彼らの暦のドゥアン7月（太陽暦ではだいたい5～6月）に行なわれる。地域によっては、ドゥアン5月の新年に行なわれるところもある。

ある村落のチャオ・ムアンに直接関与する役目を担うプー・チャオ・ムアンと呼ばれる男性は次のように説明する。

「儀式の日程は、守護霊が鶏を食べる日で、できればドゥアン7月白分3日とする。当日前夜から準備を行い、儀式はその日の早くから始める。その儀式の間は、誰も村の中に入れない。僧侶を除いて全員参加する。村人は、数多くの鶏、また一人あたり、モチ米、サトウキビ、ココナッツを混ぜて団子上にしたものを、2つ供える。ろうそく、線香、花なども供えられる。」

「プー・チャオ・ムアンが鶏の首を切る。鶏が即死なら精霊は満足だが、もがいたり逃げたりすると精霊は怒っているとみなされる。逃げた鶏は銃で撃たれる。儀式では、計40～50羽の鶏が殺される。ろうそくが2本立てられる。一本は、首が切られて湯につけられる前で、もう一本はその後につけられ、そのろうそくが燃えつきたら、精霊が召し上がった証拠として、合図の銃が撃たれる。村の入り口で見張っていた人への合図である。見張りの2人が戻ると、宴会となる。妊娠している女性と、男性でも妻が妊娠している場合は参加できない。7時半頃には終わる。」

プー・チャオ・ムアンの役目は、祠とリエン・チャオ・ムアンの管理だけではない。月4回の仏日にも村人が供え物を託されて祠の世話をするのである。このリエン・チャオ・ムアンの実践が村によって、異なる。それを図式化したものが【図】（本文末尾に掲載）である。

村の守護霊であるチャオ・ムアンの由来は、村の創建者と結びついている。固有の名称が聞ける場合もあるが、村を建てた祖父の霊（チャオ・ポー）として一般化されていることも多い。

そのチャオ・ムアンを招請して祀るリエン・チャオ・ムアンにヴァリエーションが見られる。鶏の供犠、アルコールが儀礼の要素として入っている村落と、その要素が抜け落ちている村落があるのである。前者の村では、儀礼の間、村が閉じられ、しかも、それらの村は、メーホンソーン県の中心地であるムアンからは、比較的遠距離に位置している。それらに対し、後者の村は、中心地である市街地から近在である。一部、年一度の儀礼が行われない村もある。さらに注目すべきことは、祠の位置にもある傾向が認められる。寺と隣接する場所にある祠がある村落と、村外れや、町中に単独に祠が建てられている村落の区別は、鶏、アルコールの要素の有無の区別と重なっているのである。先に、祠が寺に隣接するとしたが、村の創建から考えると、祠のそばに寺が建てられたという解釈した方が人々の語りにそうものである。

このヴァリエーションの理由について考えられるのは、仏教化あるいは「精進化」の浸透の度合いである。鶏、アルコールの要素は、仏教儀礼と相容れないものである。メーホンソーンのムアンを中心とする仏教化の流れは明らかに認められる。県の代表の寺は、ムアン市街地の

いずれかの寺であり、その代表は、タイ王国のサンガ組織と直結している。これらの村落は、車があれば、一日で回れる範囲内にあり、そのヴァリエーションは興味深い事実である。メーホンソーン県は、ビルマと国境を接し、越境する人々と出会うことも少なくない。各村落の故地も、ビルマのシャン州あるいはカヤー州にある地名を耳にした。ビルマ側の状況は、未確認であるが、彼らの故地である村落においては、リエン・チャオ・ムアンを祝祭性の濃いやり方で行なっていることは類推できる。ところで、郡が異なる⑩⑪⑫の村は、新年行事の一部として、リエン・チャオ・ムアンが行なわれている。これらの村落にも「精進化」の様子がうかがえる。ただし人々の説明では、二つの郡内に住んでいるシャンの故地は異なっていて、移住の歴史、シャン内の系統の違いをより考慮した方がいいとも聞いた。シャンと呼ばれている人々の相互に区分する由縁には、リエン・チャオ・ムアンの祀り方のヴァリエーションを通して考えられるように、移住の歴史と、国境の存在、さらにそれと連動する国家内における政治と宗教の状況が影響しているのである（国家と「民族」をめぐる問題では [Moerman 1965, Keyes 1993] の対照が注目される）。

#### 4 「シャン」を類別する複数の見方

1983年のセンサスによると、ビルマ国内には135民族が居住すると報告されている。ただ、確認しなければならないのは、135が具体的に、何という呼称の民族かということよりも、政府の立場において、どのように「民族」を規定しようとしているかというその脈絡である。ここでいう「民族」は、ビルマ語でタインインダー・ルーミョウと呼ばれている。「同胞の民族」とでも訳すべきこのことばは、政府にとっての「民族」が、「類別する」対象というよりも、「統一する」あるいは「統一してひとつの連邦国家を形成する」というその構成分子であるという政治理念であることを明示している。なぜなら「民族」ということばの用例の脈絡が、常に連邦制の維持、団結協力の単位としてだからである。個別の民族が、問題とされるのでは必ずしもない。実際に、ある指標によるある系統の人々について言及するなら、ルーミョウだけで十分なのである。連邦制の維持の国是とする国家にとって、各民族の自民族の意識高揚が「民族」の類別の目標ではないのである。現ミャンマー政府の「民族」政策、タインダー・ルーミョウという呼称の起源、意味づけの変遷などについては、今後の課題とし、ここでは言及に留めたい。

リーチの著書には、ビルマ側が「シャン」を類別するカテゴリーとして、次の3つの呼称を紹介している。「シャン・バマー」「シャン・タヨッ」「カムティ・シャン」である [Leach 1954 (1987) : 34 (40)]。現地語で言及してあるこれらの呼称は、「シャン」について、ビルマ族、中国（雲南省）との関係が識別にあたって重要であることは、歴史的に明らかである。カムティ・シャンはシャン・バマーの亜型であるとも、付記されている。この3分類はそのままルパール他編の『東南アジア大陸部の民族集団』にそのまま転用されている [Lebar et. al. 1964]。

「シャン」と「非シャン」の区別の流動性に加えて「シャン」を類別する複数の見方が存在する。ひとつは、文化省文化館局による調査報告である。しかしながら、担当官の話では、シャン州内に居住する諸民族については、未確定であり、未調査の人々も少なくないとされている。下記のリストは、シャン系統に含まれる人々としてリストアップされている人々の呼称である。「タイ・～」という呼称が多いことは「シャン」世界の現実を確実に表現している。ちなみに、ビルマ語表記では、タイはタインとなる。

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| (1) シャン=シャンジー (タイ・ロウン) | (2) マオシャン         |
| (3) タイ・ルワイン            | (4) タイ・ライン (タイェー) |
| (5) ゴウン                | (6) リー            |
| (7) サインシン              | (8) リン            |
| (9) サンタウ               | (10) タイ・ネー        |
| (11) インチャー             | (12) インネッ         |
| (13) ユン                | (14) イン           |
| (15) タイ・ワン             | (16) タイ・ティン       |
| (17) タイ・サー             | (18) タイ・キンマ       |
| (19) タイ・ルウツ            | (20) タイ・クウン       |
| (21) タイ・コウン            |                   |

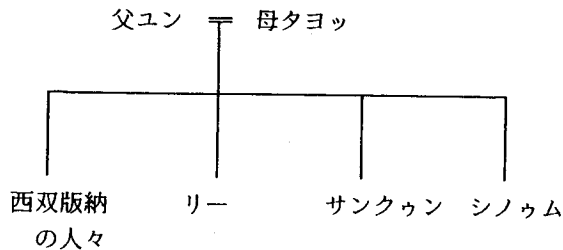
最初のシャンジーは、文字通りでは「大きなシャン」であり、タイ語の「タイ・ロウン」にそのまま対応する。しかし、シャンジーは、あくまでその他のシャン系統と区別するための由

縁であり、その由縁の基準が何かということよりも「大きい」という相対的な接尾辞がついていることに留意しなければならないと思われる。実は、1983年のセンサスには、シャンジーは含まれていないが、タイロウンが、シャンとは別に含まれているのである。シャン州東部のケントウン（チャイントウン）を中心に居住するゴウンや、歴史的に重要なマオシャンなど、その自己同定を明確に表現する人々と出会うことは困難ではない。しかしそうではない人々は、それ程容易ではない。その意味で、上記のリストは、他者からの同定の一例として認識しなければならない。その担当官は、シャンジーが出自である。自分の出自を中心に、認知の明瞭なものから順に列挙されているのである。

このように「シャン」の研究は、その類別された結果そのものもさることながら、類別する主体、その意味、類別の基準及び脈絡を把握することが重要なのである。

もうひとつに「シャン」を類別する由縁として、民族起源神話が注目される。タイの7兄弟というモチーフである。現時点で蒐集した2例を紹介しよう。

[起源神話バージョン1]



このバージョンは、ケントウン在のリーと自称する人々の語りによるものである。7人兄弟という全体枠は認知していても、すべてを提示できるわけではない。語り手によれば、長男が西双版纳に住む人々で、次男が自分たちリー、三番目のサンクウンはケントウン在の人々で、シノウムは、後世ヨーダヤつまり現在のタイ王国を作った人々であるという。シノウムは、他の兄弟から、末子のポムと呼ばれ、逆にシノウムは、長男、次男をタイ・ヤイと呼ぶのだともいう。

[起源神話バージョン2]

もう一例は、シャンジーのある語りにあるものである。その語り手は、7人兄弟だということとその呼称は説明できても、順番については一部不明である。それによると、長男はタイ・ロウン、次男はリー、三男はサンタオ、四男はタイ・ラオ、五男、六男にあたるのは、サインシン、リン、ゴウンのいずれか不明。但し、末子がタイ・ノイツマリヨーダヤであることは確かである。

いずれも7人兄弟の真ん中の兄弟については不一致な点があるが、長男と末子については一致している。上記の語り手以外の人々もその点では共通する。つまり「大きな」シャンあるいはタイ、そして「末のあるいはもっとも若い、小さい」タイについては一致しているのである。ここでも記憶の基準となっているのは、相対的なものでしかない。

仮説的にいえることは、長子とされているのが、いずれも、シャン・ソーボワが治めた人々であることである。それに対してヨーダヤは、その語源がアユタヤであることから明らかなように、ある時代以降の呼称であり、現在のタイ王国の存在、つまりその起源というよりも現実と連結する存在なのである。最後に残ったタイ系の人々の政体としての具体としてである。民族起源神話の重要な構成要素である兄弟の年序は、歴史的な政治の脈絡で解釈できる記憶の要素なのである。

## 5 「シャン文化圏」の意味するもの

最近、言語学者である新谷忠彦が「シャン文化圏」という研究対象の構想を示した。彼の構想の基盤にあるひとつの要素は、「シャン」というタームの広汎な分布であると思われる。ビルマ北部及び東部、北部タイ、中国雲南西双版纳及び徳宏さらに北部ラオスなどの地域において、共通語としての「シャン」語の位置付けに着目している。現在の言語系統の分類からいけば、「タイ (Tai) 文化圏」という名称がふさわしいのかもしれないが、文化的中心としてのシャン・ソーボワの存在に注目するなら、「シャン文化圏」というくり方も妥当のように考えられる。

やはり、チベット・ビルマ系言語の研究者である藪司郎は、最近の著書で、次のように述べる。「シャン高原の社会には民族を越えた地域的な一体感が存在することも事実である」〔藪 1995: 85〕。彼が念頭においているのは、「ビルマ北部から東部には、さきに述べた『カチン文化圏』に加えて『シャン文化圏』と呼んでよい文化共同体が存在し、この二つの文化圏は一

部で交錯している」〔藪 1995: 86〕という現状認識である。

用例としては、ビルマ側がタイ系の言語を話す人々に対する呼称がシャンである。この他者からの規定という特質が、「シャン文化」そのものの規定を曖昧にしている。「シャン」をひとつの民族集団としてくるにはさまざまな問題があり、その多義性、多重性こそが「シャン」なのだという論理で、既存の研究の整理を進めてきた。従って「シャン文化」を「ビルマ文化」と同列に扱うには、「シャン」の規定が不可欠なのである。しかしながら、この状況にもかかわらず、上記の言語学者がいうように何らかの共通意識がシャン高原で生きる人々の間に存在するとしたならば、その意識が何で、そしてその意識がどのようにして形成され、さらにその意識がどのように変容してきたのかを考えなければならないのである。その作業が、「シャン文化」の実像にもっとも近接する道なのである。多くの研究者が、上座仏教、水稲耕作の要素を共通のものとして指摘している。リーチはそれらに加えて、環境規定の要素に注目している。先の二つの要素では、周辺のビルマ文化などとの相違点は不明瞭となる。その意味でシャン高原というフィールドの特質は、今後検討されてしかるべきであろう。今後、さらに「シャン」と呼ばれる人々の文化的行動についての詳細な調査研究と比較作業が必要なことはいうまでもないが、それに加えて、シャン・ソーボワに象徴されるこの地域の政治状況の分析というのが必須になると思われる。その意味で、リーチのアプローチの対象が政治体系であったことは、再考に値する。たまたま政治体系なのではなくて、「世界」解釈の理念的分析の有効な方法論としての再評価をしたいのである。その作業は、時系列と密接にかかわり、当然のことながら、現在の国家体制までも視野に入れることになるのである。シャンの地域性の本格的な分析はその向こうにある。

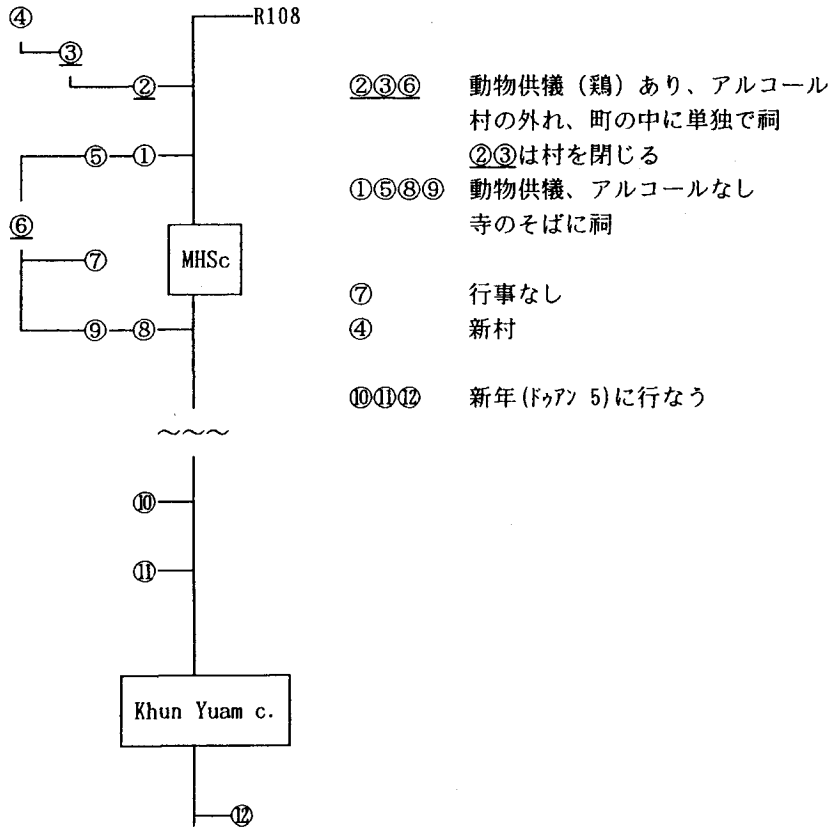
付：ビルマ政府文化省民族調査項目

次の項目は、ビルマ政府文化省が、まだネー・ウィンが政権の座にあった時代（おそらく70～80年代前半）に、全国の連邦を構成する諸民族の調査を実施した際の調査項目のリストである。90年代の初めに、文化省高官から、いずれ各州別の報告書を刊行予定と聞いたが、未刊のままである。各州レベルでの実態調査の一部は閲覧したことがある。

- |           |              |            |
|-----------|--------------|------------|
| (1) 身体的特徴 | (2) 身体装飾     | (3) 装身具    |
| (4) 居住地域  | (5) 民族名      | (6) 来歴     |
| (7) 言語・文学 | (8) 信仰       | (9) 慣習     |
| (10) 年中行事 | (11) 生業      | (12) 生産物   |
| (13) 芸術   | (14) 道具      | (15) 技術    |
| (16) 行政   | (17) 階級      | (18) 親族    |
| (19) 伝統知識 | (20) 伝承・諺・謎々 | (21) 遊戯    |
| (22) 気性   | (23) 男女交際    | (24) 婚姻    |
| (25) 発火法  | (26) 度量衡     | (27) 祈願    |
| (28) 食習慣  | (29) 価値観     | (30) 禁止・禁忌 |
| (31) 地方政治 | (32) 家屋      | (33) 産育    |
| (34) 葬制   | (35) 命名      | (36) 薬方    |
| (37) 裁判   | (38) 選挙      | (39) 予言    |
| (40) 教育   | (41) 人口      | (42) 経済    |
| (43) 生活水準 | (44) 税制      |            |



【図】



## 文献

Durrenburger, E. & N. Tannenbaum

- 1989 "Continuities in Highland and Lowland Religions of Thailand," *Journal of the Siam Society* 77-1: 83-90.

Eberhardt, N.

- 1988 "Knowledge, Belief and Reasoning: Moral Development and Cultural Acquisition in a Shan Village of Northwest Thailand," Ph D. Thesis, Univ. of Illinois.

Keyes, Ch. F.

- 1993 "Who are the Lue?: Revisited Ethnic Identity in Laos, Thailand, and China," Paper presented at Seminar on the State of Knowledge and Directions of Research on Tai Culture, Sponsored by National Culture Commission, Bangkok.

Leach, E. R.

- 1954 *Political Systems of Highland Burma*, London: the Athlone Press (関本照夫訳『高地ビルマの政治体系』弘文堂 1987)

Lebar, F. K. et al. (eds)

- 1964 *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, New Haven: HRAF Press.

Moerman, M.

- 1965 "Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who are the Lue?," *American Anthropologist* 67-5: 1215-1230.

Sangermano, Father V.

- 1893(1995) *Description of the Burmese Empire*, Westminster (reprinted as *The Burmese Empire A Hundred Years Ago*, Bangkok: White Orchid Press).

Scott, J. G. & J. P. Hardiman (ed)

- 1900-1901 *Gazetteer of Upper Burma and Shan States*, 5 vols, Govt. Press.

高谷紀夫

- 1993 「民族の『仲間意識』と『よそ者』意識—ビルマ世界におけるシャン族の視角」飯島茂編『せめぎあう「民族」と国家』アカデミア出版会、pp. 59-82.

Tannenbaum, N.

- 1990 "The Heart of the Village: Constituent Structures of Shan Communities," *Crossroads* 5-1: 23-41.

荻 司郎

- 1994 「民族と言語」綾部恒雄・石井米雄(編)『もっと知りたいミャンマー』弘文堂、pp. 73-110.